

■論文題目	住民主体の景観づくりに関する研究－盛岡市・紺屋町を対象として－		
■氏名(学籍番号)	鈴木輝莉(0412023306)		
■指導教員	蒲 敏哉	■所属コース	地域社会・環境コース
■キーワード	紺屋町	まちづくり	景観

背景

まち並みは地域固有の文化や歴史を反映しつつ、時代とともに変化してきた。例えば、京都の統一的な景観や岐阜県白川村の合掌造りは地域の特色を示す事例がある。まちの開発において重要なことのひとつにその場所に住む人々の意見を取り入れることがある。東京都国立市のマンション解体事例では、富士山を望む景観を守るため、住民の意見が反映された。開発が進む中で住民の日常風景や景観への配慮が必要である。このような背景を受け、住民がつくるまちづくりに着目した。

先行研究と目的

これまでに多くの研究が景観保全や地域特性に関する課題を取り上げている。高木ら（2022）は、地域をマネジメントしていくことは、その地域を中心とした様々な人々との連携や協力をもとに成り立つこと考察している。さらに、菅原ら（2005）の研究によると、大学生がカメラで撮影した中津川周辺の好きな景観は、「岩手銀行中の橋支店」「ござ九」「岩手公園」「喫茶深草」が主ということがわかった。中津川周辺では、紺屋町には人々が好ましいと感じる建物が多く存在するということがわかった。その中津川に隣接している紺屋町の活性化に向けて住民に様々な事業を提案した福井ら(1998)の研究によると、具体的な内容から事業の実施計画と勘違いをされ、戸惑いや不信感を持たれたとされていた。そのため、事前の説明と地区住民が主体的に再開発の必要性を共有するための行政活動が不可欠としていた。このことから、まちづくりの活動は事前説明が大事であり、住民からの理解を得ることが必要とわかる。紺屋町には、今までなかった高層マンション建設の問題を機に、まちづくりの会が発足された。本研究では、紺屋町に題材に住民を中心としたまちづくりに焦点を置き、今後の紺屋町の在り方を考察することを目的とする。著者がまちづくりについて提案し、実行するのではなく、その地域の活動に参加を行うことや、住人や関係者の方々からお話を伺うことでその「まち」らしいまちづくり、景観についてまとめることが特徴となっている。

調査概要

調査対象は、紺屋町のまちづくりに関心がある方を対象とする。紺屋町町内会、紺屋町まちづくりの会、紺屋町内のお店の方々に聞き取り調査を行い、それぞれに紺屋町についての様々な質問を行った。また、紺屋町まちづくりの会のミーティングに参加し、日々どのような活動を行っているのかを調査する。そして、日々の活動や、聞き取り調査から得られた結果から客観的にまとめ、景観の視点から今後の紺屋町の方角性を考察する。

景観の定義

景観法の基本理念の一つに「良好な景観は、地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動等との調和により形成されるものであることにかんがみ、適正な制限の下にこれらが調和した土地利用がなされること等を通じて、その整備及び保全が図られなければならない。」というものがある。また、盛岡市景観計画には、景観の構成要素は、周辺環境に与える影響も大きい公共的な役割を担っているとしている。このことから、本研究では景観の定義を「そのまちの特徴の要素を取り入れ、住民の生活と調和している風景」とする。

盛岡市・紺屋町の特徴

慶長二年(1597)に南部第 26 代信直が不来方の築城をはじめ、城下町の整備が始まった。これが現在の盛岡市の中心市街地の骨格となっており、城下町の情緒と風格が今も残っている。

紺屋町は盛岡の中心部に位置し、近くには中津川が流れ、江戸時代の城下町の面影や大正時代に建てられ

た歴史ある建物が残るまちである。紺屋町の名前の由来は、中津川を利用した染物が盛んで染物屋が多く存在していたことである。江戸時代に町人のまちとして栄えた場所で、今も城下町としての面影を残している。

調査結果と考察

1. 紺屋町町内会

紺屋町町内会には、紺屋町の現状と景観についての意見の聞き取り調査を行った。紺屋町の現状は、高齢化で空き家が増えており、コロナ禍の影響もあって住民同士の交流が減少している。景観については、住民にとっては日常風景であり特に気にはしていなかった。住民の生活が上手く楽しく行え、落ち着いた住環境があることが一番の景観であり、風景だと思っている。そのために子ども会への支援を行っている。

2. 紺屋町まちづくりの会

紺屋町のまちづくりを先頭に立って紺屋町まちづくりの会には、この会ができた経緯や今後の方針を伺った。高層マンション建設問題があり、今まで紺屋町には高層の建物がなく、住民側がマンション建設について知らなく(説明がなかった)、個人経営の小さなお店が多くあるため、このような人たちが相談や協力できる場所を作った。現在の活動としては、住民の方々に会について理解してもらうためのイベントや紺屋町らしさについて知っているところである。まち並みよりも人との交流を大事にしている。今後、住民の理解を得ることができれば、市や統一感が出るようなものを設置していきたいと考えている。

3. 紺屋町のお店の方々

紺屋町の外部から見たイメージと、紺屋町関係者の様子を調査するため、紺屋町にお店を構えている方々に調査を行った。お客さんと紺屋町について話すこともあり、数年で変化することが多く不安の声もあるという。どの方々からも歴史あるものを残しながら発展してほしいという声があった。新しいものの中に、古い建物・ものが残っていることを魅力と感じている。

調査結果より、紺屋町のまちづくりに関わっている方々は、歴史が残るまちが紺屋町らしさであり、住民同士の良好な関係構築を望んでいることが分かった。紺屋町の今後の在り方について、景観に関しては紺屋町の特徴である歴史的な建物と新しい建物が混在するバランスを保っていくべきであり、地域のコミュニティに関しては、町内会や紺屋町まちづくりの会の活動を軸に、世代や立場を超えた交流の機会が必要であると考察する。

結論

紺屋町の特徴は、歴史と現代が混在していることであり、景観の観点から調和しており、紺屋町の景観を作っていると考え。紺屋町の未来を考えるうえで重要なのは、歴史と現代が調和するまち並みを維持し、地域コミュニティを活性化させ、紺屋町ならではの魅力を継承しながら発展させていくことである。紺屋町がその独自性を維持しながら発展するためには、「歴史と現代の調和」「地域コミュニティの活性化」「紺屋町らしさの継承と発展」の3つの要素を基にしたまちづくりが必要である。これらの課題に対応するためには、紺屋町まちづくりの会をはじめとする各団体が、それぞれの役割を果たしながら、共通の目標に向かって協力することが重要である。

主な引用文献

福井正明、上山輝、趙菁、佐々木泰和. 景観形成によるまちづくりに関する調査研究

—盛岡市紺屋町通りの活性化について—, 岩手大学教育学部研究年報, 1998, 57(2), p1-14

菅原崇史、三宅論. 盛岡市中心市街地を流れる中津川の景観の特徴「中津川の好きな景観」をテーマに撮影された写真を通じて, 日本都市計画学会 都市計画論文集, 2005, 40(3), p 829—834.